

# OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリット



March.2018

No. 54



命を守り、希望をつなぐ。

# 防災・減災・復興学研究所

関東学院大学 Disaster Management Institute



#### ▲「防災・減災・復興学研究所」事業イメージ

た。人の生き方や価値観が多様化する中、本当の意味での防災・減災・復興とは何か。身体的・物理的な側面だけでなく、社会や経済、精神や文化、人と地域の未来までを含めて総合的に防災を考えていくために、関東学院大学に何ができるのか。そうした思いが研究所発足の一つのきっかけになっています。

関東学院大学は2011年の大震災の直後に、都市社会学や地方自治、心理学、経済学、土木・建築、情報・通信など様々な分野の研究者が集い、「私達に何ができるか」という主旨の学際プロジェクトチームを立ち上げました。これを母体に、さらに

# 人や社会の幸福に繋がる 防災・減災・復興学を提唱

人や社会の幸福に繋がる  
防災・減災・復興学を提唱

関東学院大学は、自然科学や工学の領域において取り組んできた「防災」のアプローチに加え、人文・社会科学の領域を融合させて学際的に研究する「防災・減災・復興学研究所」を発足しました。規矩大義学長自ら代表を務めるこの研究所では、新たな「防災・減災・復興学」の構築と提唱を目指し、近隣自治体をはじめとした地域・社会とも共有し、さらには教育へと繋げていきます。

また、この活動を大学の新たなブランディング事業に位置付けると共に、研究力や発信力の強化、そこで本事業の意義や戦略、そして、あるべき防災の姿について規矩大義学長に伺いました。

研究成果を発信。

また、この活動を大学の新たなブランディング事業に位置付けると共に、研究力や発

そこで本事業の意義や戦略、そして、あるべき防災の姿について規矩大義学長に伺いました。

人や社会の幸福に繋がる  
て好ましい傾向ではないと考えます。もち  
程修了責任。

防災・減災・復興学を提倡

て好ましい傾向ではないと考えます。もちろん、ハードとソフトを組み合わせた多角構造の防災施策が必要なのですが、それらの相互補完的な効果を正しく評価する仕組み自体、現時点では十分に確立されていないのです。

一方、ここに来て使われ始めたのが「減災」という言葉です。被害が出ることを前提に、事前の施策や備えにより、被害を少しでも減じようという考えです。ただ、これも本気で減災を考えるならば、想定される被害を的確に定量化し、どんな施策によつてどこまで減じられるかを客観的に証明しなければ、「何もしないよりは被害を減らせた」という口実に過ぎません。防災技術の向上に加え、今まで以上に精緻な予測技術の開発が急がれます。

また、被災地や被災者が「復興」に向けて立ち上がるためには、未来に繋がる希望を持つことが大切です。都市機能やハード

A medium shot of a man with dark, slightly messy hair, wearing a dark pinstripe suit jacket, a white shirt, and a patterned tie. He is looking slightly to his left with a neutral to slightly smiling expression. The background is an indoor setting with wooden paneling and glass doors.



# 関東学院大学 学長 規矩 大義

九州工業大学大学院工学研究科設計生産工学専攻博士後期課程修了。  
横浜国立大学助手を経て、官民の防災研究の職場を経験。  
2002年関東学院大学工学部着任。2013年12月本学学長就任。  
2017年12月再任(2期目)。

よ」の教えに基づき、人や社会の幸せを追求し、社会の持続的発展に寄与するための教育・研究を実践しています。その意味で、防災は非常に関東学院大学らしい研究分野だと言えるでしょう。本研究所でも実践神学などキリスト教の価値観を、工学や都市社会学を研究する上で重要な構成要素と捉えています。

人の「いのち」と「希望」を守ることに着目した全学的な防災研究は、総合大学としての強みと建学の精神に合致した、関東学院大学ならではの取り組みであり、文部科学省の「平成29年度私立大学研究プラザ・ディイング事業」に神奈川県に本部を置く大

学で唯一選定されました。永続的な研究を行い、太い柱へと成長させることを見据え、平成31年度には「防災・減災・復興学センター」へと発展させたいと考えています。将来的には教育に展開し、サービスラーニング科目や副専攻制度の開設、社会人向けの講座の開講等を行うと共に、近隣の自治体や地域、企業、さらに海外との協働も推進します。昨年末には韓国のかトリック関東大学校災害安全研究センターとの間で学術交流協定を締結し、今後はペトナムの大学との連携も図ります。

私自身、産官学を経験し、様々な立場から社会のニーズを見つめてきました。関東学院大学が、眞に人や社会の幸福に繋がる防災・減災・復興学を実現し、永続的な教育・研究拠点となることで、大学のブランディング、即ち社会との約束を確立するため、プロジェクトリーダーとして全学を牽引していきたいと思います。



関東学院大学 経営学部経営学科 学科長  
V-BIZ 担当  
**渡辺 竜介**

中央大学大学院商学研究科博士後期課程を満期退学。  
関東短期大学、諏訪東京理科大学経営情報学部を経て  
2009年関東学院大学経済学部に着任。  
2017年より経営学部経営学科学科長に就任。  
専門は財務会計。

関東学院大学が  
日本企業の協力を得て  
ハノイ貿易大学で  
教育プログラムを開講。

学術交流協定を結ぶベトナムのハノイ貿易大学が、新たに開設した「日本式国際ビジネス学士課程」に、関東学院大学が教育プログラムを提供します。その概要を経営学部経営学科長の渡辺竜介教授にお聞きしました。

由起のビジネスを担う人育成する「V-B-N」

関東学院大学はベトナムのハノイ貿易大学が昨年9月に開設した「日本式国際ビジネス学士課程」に、現地の学生向けにカリキュラムを提供します。本学の経営学部における「ビジネスプラン」のカリキュラムと、企業と連携して学生を育てる「K-biz」に注目したハノイ貿易大学の要請を受け、ベトナムに法人や現地支社を持つ日本企業と協力して準備を進めてきました。教員を派遣して、この4月から本格的に始動します。

提供するカリキュラムは、ハノイ貿易大学の科目とも連動しつつ、年次により「ビジネスプランⅠ・Ⅱ・Ⅲ」と発展させていきます。基礎知識のインプットから始まり企業から提示された課題に対するグループワーク、最終的には高度なビジネスプラン



◀ VJCC 開校セレモニー写真

ハノイ貿易大学

首都ハノイに所在する文系総合大学。1960年に創立されたベトナム最難関大学の一つで、教育の質も高く、官民に多くのリーダーを輩出しています。1970年代前半から日本語教育に取り組み、2006年には日本語・日本文化コースを開設。2016年に関東学院大学と学術交流協定を締結。2017年9月に日本型のビジネスを、知識、スキル、振る舞い、文化などの視点から学び、ビジネスの現場で活躍できる人材の育成を目的とする「日本式国際ビジネス学士課程」を開設。第1期生は定員50名に対して150名の応募があり、英語力を重視した71名を選考し、少数精銳の教育を行っています。

V-BIZ 協力企業

イオン株式会社 / 株式会社エイチ・アイ・エス / 花王株式会社  
/ 東京ガス株式会社 / 日本航空株式会社 / パナソニック株式  
会社 / 本田技研工業株式会社 (2017年12月現在)



五、集金園志



# 関東学院大学 経営学部 学部 辻 聖二

九州大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。  
1995年関東学院大学経済学部に着任。  
関東学院大学キャリアセンター長、  
入試センター長、  
経済学部経営学科長等を歴任。  
2017年4月より経営学部学部長に就任。

経済学部経営学科を改組し、経営学部が創設されて一年。社会連携教育プラットフォーム「K-ビーグ」を軸に、現在進められているプロジェクトや、今後の展望について学部長である辻聖二教授に伺いました。

ビジネスの視点から  
地域や社会に貢献する  
プロジェクト教育の  
さらなる充実へ。

A photograph showing a group of people at an indoor market or exhibition booth. Several individuals are wearing green aprons with the "K-biz Marche" logo. They are standing behind a counter filled with various fruits and vegetables, including carrots and leafy greens. A sign above the counter reads "第4回 K-biz マルシェ by 関東学院大学" and "12/7(土) 10時~午後3時". Other signs in the background mention "K-biz" and "関東学院". The people are dressed in casual winter clothing like jackets and hats.

トを掲げてい  
ますが、従来  
に比べると、  
学生との対話  
がより活発に  
なつたと感じ  
ています。

身につけた  
基本知識と実  
践力を土台に、  
2年生の秋か  
らは少人数制  
による「専門ゼ  
ミナール」が始  
まり、仲間や

行から提示された課題に、学生が取り組み  
ます。地元で展開するスーパー・マーケット  
にもご協力いただき、ヒアリング調査を行  
いながら、プロモーション方法を提案して  
いきます。

中外製薬や毎日新聞社と連携した「みら  
くるプロジェクト」は、障がい者スポーツ  
の魅力を紹介して、支援や理解を促す、社  
会貢献色の強いプロジェクトです。学生は  
運営や企画のスタッフとして、横浜近辺や  
都内でイベントを随時開催し、共生社会の  
実現を目指しています。

他にも様々なプロジェクトが進行中で  
すが、企業や地域からの期待も年々高ま

K-hiz サポート企業

アーバン・コーポレーション株式会社 / 株式会社KADOKAWA / 京浜急行電鉄株式会社 / 中外製薬株式会社 / 株式会社野毛印刷社 / 株式会社博報堂 / 株式会社毎日新聞社 / 株式会社三菱東京UFJ銀行 / 株式会社モスフードサービス / 相鉄ホテル株式会社〈横浜ベイシェラトン〉(2017年12月現在)

# 建築系大学住宅課題優秀作品展「第17回住宅課題賞」

昨年11月25日に竹中工務店東京本店「ギャラリー エーカワード」(東京都江東区)で開催された第17回「住宅課題賞2017」公開審査会で、関東学院大学建築・環境学部の菅野楓さん(3年)が優秀賞1等を受賞しました。若い男性2人が空間を分け合つて住む都市住宅を設計。黄金町という街の持つ複雑な歴史や環境を読み取り、この場所でしか成立しない、新しい建築のカタチを提案しました。そこで受賞者である菅野さんご本人と、指導教員である柏谷淳司専任講師に、作品の特長や制作過程、評価のポイントについてお聞きしました。

## 2人の住人が空間を分け合う 都市に住むことの本質を表現

「住宅課題賞」は東京建築士会が2001年から毎年開催している設計コンペティションです。建築の学部や学科を持つ首都圏の37大学48学科が、授業で制作した住宅課題の作品から1点ずつ代表作品として出展。公開審査により「優秀賞」3作品(1等3等)と「審査員賞」5作品が選出されます。

「実は前回、代表に選ばれた先輩の作品を見るために、審査会場に足を運びました。その時から楽しそうだな、来年は自分が出たいなと思っていました。だから学内の代表に選ばれた時は本当に嬉しかったです」

菅野楓さんは現在、建築環境学部の「すまいデザインコース」で学んでいます。今回、授業の設計課題として教員から提示されたのは「都市／住宅」という漠とし複雑な構造ゆえに、公開審査に向けた模型やプレゼンテーションの準備では、終わりの見えない作業が続いて大変だったとのこと。迎えた公開審査の会場では、他の学生達の表現力や模型のレベルの高さに刺激を受ける一方、自らのプレゼンテーションについては少し不安もあったそうです。

「部屋の大きさや天井高、階段の形状などは様々で、全体的に統一感のない外観ですが、それがかえって黄金町らしいかなと思いました。それぞれの場所に良さがあり、見える景色も違うので、気分によって階段に座って考え事をしたり、上の階で景色を眺めたり。そんな住まい方つて楽しいだろうな」と

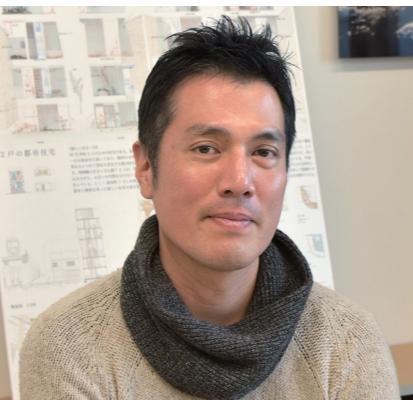
複雑な構造ゆえに、公開審査に向けた模型やプレゼンテーションの準備では、終わりの見えない作業が続いて大変だったとのこと。迎えた公開審査の会場では、他の学生達の表現力や模型のレベルの高さに刺激を受ける一方、自らのプレゼンテーションについては少し不安もあったそうです。

関東学院大学 建築・環境学部 3年  
菅野 楓さん



「短い審査時間では理解されにくい作品なのかなと心配でしたが、審査員の方々が見た瞬間に『ああ、いいね』と乗り気になってくれて。こちらが説明する前からいろいろ質問してくれて嬉しかったです」

審査員の巡回による一次審査、続く二次審査も順調に通過。最終審査では5人の審査員中2人から最高点(5点)を獲得するなど高い評価を受け、見事に全48作品の頂点に立ちました。今回の受賞は大きな自信に繋がったと言う菅野さん。将来志している住宅設計だけでなく、様々なスケールの設計にチャレンジしていきたいそうです。この経験を生かして、さらなる飛躍に期待しています。



関東学院大学 建築・環境学部 専任講師  
柏谷 淳司

東京大学工学部建築学科卒業。  
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了。  
現在、カスヤアーキテクツオフィスを主宰。  
2013年より関東学院大学専任講師を務める。  
JIA(日本建築家協会)・  
東京建築士会・日本建築学会会員

菅野さんには「作品的には必ず上位入賞できると思うので、あとは理解してもらえるかどうか」と伝えていました。今回、彼女はあえて「より複雑に表現する」という表現にチャレンジして、労力を惜しまず、過去に例のない都市住宅を提案しました。そうした人知れぬ努力の積み重ねは必ず作品に表れるものであり、審査員にもそれが伝わったのだと思います。



▲受賞作品「2戸の都市住宅」  
「都市／住宅」という課題で、横浜市中区黄金町に提案した都市住宅の作品。  
柔らかな曲線は2人を隔てる壁ではなく、自分という存在が、  
自分以外の存在や環境によって形作られていることを表しています。

今回、設計の課題として学生達に提示したのは、「都市／住宅」という抽象的かつ普遍的なテーマです。敷地には、正面に桜並木、反対側は京急線高架下を望む、黄金町に実在する角地を指定しました。黄金町は、かつては売春宿等の違法な店舗も多い治安の悪いエリアでしたが、近年、新たな街作りに取り組み、若いアーティストによるギャラリーやカフェなどが増えている面白い街。学生達の様々な発想を引き出すために、あえてこの猥雑なエリアを選びました。

その中で菅野さんが提案したのは、曲線の壁によつて互いの存在を感じながら、20代の独身男性2人が暮らす立体的な都市住宅です。室内を上下するにつれて変化する風景に加え、一筋縄では読み解けない複雑な空間は、黄金町の裏路地に入り込んでいくかのよう

な感覚をも、うまくこの垂直な建物の中に表現しています。

指導者としては、学生に対して出題した以上、「きっとこんな作品が出てくるのではないか」というある程度の予想があるわけですが、この作品はそうした予想を超えていました。逆にこの作品が僕らに対して何かを問い合わせてくる、そんな迫力を持つた作品が出てきたことは嬉しい限りです。

菅野さんは「作品的には必ず上位入賞できると思うので、あとは理解してもらえるかどうか」と伝えていました。今回、彼女はあえて「より複雑に表現する」という表現にチャレンジして、労力を惜しまず、過去に例のない都市住宅を提案しました。そうした人知れぬ努力の積み重ねは必ず作品に表れるものであり、審査員にもそ

きました。実はそれらはかつての違法な店舗の痕跡だつたりするのですが、そうした独特の雰囲気も取り入れたいなと思いました」

街から読み取った情報を元に、菅野さんが取り組んだのは、20代の独身男性2人が住む6階建ての都市住宅です。

「黄金町で若い男性2人がどういう住まい方をするのかということも考えて、発想を広げていきました。互いの居住スペースを、単に階層で分けるのではなく、建物全体をうまく分け合うような住まい方ができたらいいなと考えました」

「黄金町で若い男性2人がどういう住まい方をするのかということも考えて、発想を広げていきました。互いの居住スペースを、単に階層で分けるのではなく、建物全体をうまく分け合うような住まい方ができたらいいなと考えました」

試行錯誤を重ねるうちに、曲線的な壁で仕切ることで、空間に馴染みが出てくることを発見。また、方位や高さによって景色が変化していく面白さにも着目しました。



▲表彰式でクリスタルトロフィーを授与され  
インタビューに臨む菅野楓さん

# 京都大学名誉教授・清水展氏が「日本学士院賞」受賞。

関東学院六浦小学校および中学校・高等学校の卒業生で、京都大学名誉教授・関西大学特任教授である清水展（ひろむ）氏が、昨年「第107回日本学士院賞」を受賞されました。学術上特にすぐれた論文、著書等の研究業績に対しても、日本学士院が授与するこの賞は、1911年創設という長い歴史を持つ、非常に権威ある賞です。

清水氏は長年フィリピンでフィールドワークを行っている文化人類学者で、著書『草の根グローバリゼーション—世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』（京都大学学術出版会）が高く評価され、今回の受賞となりました。そこで清水氏に、関東学院での思い出や、ご自身の研究、受賞の喜びについてお聞きしました。

## 大きな影響を受けた 関東学院での日々

私が生まれ育った家は、横須賀の谷戸と呼ばれる、細い谷の入り組んだ地区のどん



文化人類学者 京都大学名誉教授  
**清水展（しみず・ひろむ）氏**

1951年神奈川県横須賀市生まれ。関東学院大学六浦中学校・高等学校卒業、東京大学教養学部卒業、同大学大学院社会科学研究科修士課程修了後、アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所客員研究員。1979年東京大学助手、1985年から九州大学助教授、教授を経て、2006年より京都大学東南アジア研究所教授。2017年『草の根グローバリゼーション—世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』で第107回日本学士院賞受賞。

## 生涯の研究対象である フィリピンとの出会い

東京大学の大学院生だった1977年から、フィリピン・ルソン島西部のピナトゥボ山麓にある、電気もガスも水道もない村で20か月暮らし、ネグリート系先住民アエタ族の調査を行いました。以来、40年以上にわたって、フィリピンの調査研究に携わっています。1991年6月にピナトゥボ山が20世紀最大級の大噴火を起こした時、私はちょうど研究のために1年間マニラに滞在していました。現地に飛び、被災したアエタ族の友人と難民キャンプで再会し、その後10か月にわたって災害緊急支援や生活再建支援をするNGOでボランティアワーカーとして働きました。私は技術者でも医療人でもないので、もっぱら国内や海外から来たジャーナリストや支援者達に、アエタ族の価値観や噴火前の生活や世界観を説明しました。言つてみれば、文化的な翻訳です。その時は調査研究をせずに友人とアエタ族の話を聞いていたのですが、あとから思えば、「人になれ奉仕せよ」という坂田祐先生の教えが無意識のどこかにあつたのでしよう。

第107回日本学士院賞を受賞した著書『草の根グローバリゼーション』は、フィ

▼ハバオ村でキッドラットと新年を祝う（2016年1月1日）



リビン・ルソン島北部の先住民イフガオのハバオ村で、1998年から短期ずつですが毎年繰り返した、15年にわたるフィールドワークの研究成果をまとめたものです。イフガオの人達は棚田耕作をしていて、その美しい棚田はユネスコ世界遺産に登録されています。また、ここは太平洋戦争末期に、日本軍の総司令官・山下奉文将軍が率いる主力部隊が立てこもり、降伏するまで3か月にわたって戦いを繰り広げた、日本と縁の深い土地でもあります。

この村を研究対象にしたきっかけは、旧知の間柄であるフィリピン人映画監督のキッドラット・タヒミックが、村の長老のロペス・ナウヤックと友人だったことで、その長老は、棚田を保全して環境を守るために、そして地場産業としての木彫りの材料を確保するために、村人をまとめて上げて、植林運動を始めようとしていました。私はこの村に非常に興味を持ち、日本とフィリピンのNGOを結びつけるなど、植林運動の積極的な支援に動くと共に、冷戦が終結してグローバル化が急速に進む現代社会の一端を、この山奥の村で暮らす人々の生活を通して身近に観察しました。

ハバオ村では、約350世帯1800人中、170人以上が海外に出稼ぎに行っています。自らの伝統や文化、生活を守るために、辺境の人達はグローバル化の波に飛び込み、強かに生きています。言い換えれば、グローバル化はそれほど凄まじい力で、世界の隅々にまで影響を及ぼしているのです。当然日本も例外ではなく、現代社会が等しく直面する問題が、この個別具体的な現場だからこそ際立つと言えます。

詰まりにありました。当時ここは戦後の引揚者が暮らす2階建ての長屋があり、帰る田舎もなく頼る親戚もない人達が、生活保護を受けたり、ニコヨンやシッタイ（失业対策）と呼ばれる日雇い労働をしたり、

▼授賞式当日、研究展示ブースの前にて



日本学士院賞を受賞された  
**日本学士院賞受賞者 清水展**

日本学士院賞受賞の連絡をいただいたのは昨年3月です。この賞は明治末期に始まり、東京・上野公園にある日本学士院会館で行われる授賞式には、天皇皇后両陛下がお出ましになられるなど、とても名誉ある賞です。6月の授賞式の午後には皇居にお招きいただき、両陛下、皇太子殿下、秋篠宮両殿下、宮内庁長官らと午餐会をご一緒させていただきました。また、夜には文部

科学大臣主催の晩餐会が帝国ホテルで行われました。両陛下とお会いした際には、フィリピンを訪問された時の思い出などを皇后陛下がお話くださいました。受賞者の多くは理系の研究者ですが、今回、フィールドワークという文化人類学の手法と成果を評価していただいたことは、先人の方々が築き上げてきた地道な研究の蓄積を基礎とする「フィールドの学」の一つの到達点としての評価でもあり、大変嬉しく思います。

私は「フィールドワークは知的の総合格闘技だ」と話すことがあります。対象を理解する研究手法であり、そこには自ら現地に赴き、生身の人間と接し、知性・感性・想像力・気力・体力を総動員して

感覚と織細さが両方必要です。あまり敏感だと心が通じないようなもどかしさを感じるかもしれません。しかし、生身の人間同士が顔を合わせて会話をして、それを感じるかもしません。しかし、生身の方を学ぶ愚直なフィールドワークは、西歐的な社会科学のスタイルとは全く異なり、私を新しい世界へと導いてくれます。そこ

米兵相手に違法な商売をして暮らす、荒んだ場所でした。小学校に上がる前のことですが、幼稚園の先生がわざわざ自宅まで来て、「清水くんは勉強ができるし、地元の学校ではなく、関東学院に行つたらどうか」と両親に勧められました。その時は父親の判断で地元の小学校に入つたのですが、2年生に上がる前に再び、その先生が来て「関東学院が編入学の募集をしているから」と熱心に説得してくれたんです。そのおかげで、小2から高校卒業まで関東学院で過ごしました。

礼拝で讃美歌を歌つたり、聖書を読んだり、子ども心にもこんなに違う世界があるのかと思いましたね。「人になれ奉任せよ」という坂田祐先生の言葉は、最も根本的な価値観、社会との関わり方を私に教えてくれました。正直言つて、その頃はよくわからなかつたのですが、今になって本当にそう思います。貧困と暴力が日常だった引



▲平成29年6月12日に行われた授賞式での記念写真。  
清水氏を含め、9件10名が授賞した

場者寮の世界と、関東学院の穏やかで温かな世界。全く違う二つの世界を毎日行き来

する中で、社会の多面性を経験したこと、そしてキリスト教の世界観に触れたことが、のちに私が文化人類学者になることに少なからぬ影響を与えていたと思います。



# 父親同士が力を合わせ、園庭を進化させていく 子ども達の成長を支える「お父さんの会」の活動。

関東学院六浦こども園の園庭は、豊かな自然の中、手作りの遊具で夢中になつて遊び込める冒險の場。子ども自身が主体的に挑戦できる環境作りに大きく貢献しているのが「お父さんの会」です。お父さん達の自主的な活動により、より良い園庭を作るためのワークショップ、そしてバーベキューや流しそうめんなどの季節行事を実施しています。その活動について根津美英子園長や参加者の皆さんにお話を伺いました。

## 園庭作りにイベントに お父さん達が大活躍

お父さんの会は、2013年に新しい園舎で認定こども園として歩み出したのを機に、有志の方々が集まつて発足しました。現在の登録者数は80人以上。卒園生のお父さんも多く、月1回の活動で園庭の遊具やビオトープの整備を行っています。

園庭を設計したのは関東学院大学建築・環境学部の中津秀之准教授です。当初から『この園庭は未完成。子ども達を見つめながら、親御さんと一緒に園庭を育てていくのがコンセプト』とおっしゃって、今でもお父さんの会と共に園庭作りに携わつてくださっています。(根津園長)

現在園庭にある砂場や山、花壇、見晴台やピザ窯などは、どれもお父さん達による手作りです。活動の一環として全国の先進的な園庭の視察も実施。一昨年は北海道、昨年は山形の園庭を訪問見学しました。ま



▲夏の恒例行事「流しそうめん」

た、お父さんの会は様々なアウトドア企画も実施しています。特に夏の「流しそうめん」には百人以上の親子が集合。大学の図書館裏から竹を伐採することから始まり、手作りで組み立てるレーンは年々長さが延びて、今では30メートル以上に。子ども達が大喜びする名物イベントです。

取材に訪れた日は、子ども達が創作活動を楽しむための「工作小屋」作りと芋煮会を実施。参加者は大工作業、樹木や花壇の世話、遊具のメンテナンス、薪割りや火おこしなど、思い思いに作業をこなし、子ども達も楽しそうに手伝っています。参加者

は室内でももつと冒険や挑戦ができるよう環境を作つていただきたいと考えています。親子でのアウトドア企画もますます充実させ、先生達とお父さん達が協力し合いながら、一緒にこども園をより良いものにしていきたいですね」

「園庭作りに終わりはありません。来年度は室内でももつと冒険や挑戦ができるよう環境を作つていただきたいと考えています。

「父親同士が交流できる貴重な場。小学校に上がつてもお付き合いが続いています」  
「子ども達の僕を見る目が変わったと思いまます。父親が園庭を作ることは、子どもの目には頼もしく見えるようです」



▲子どもと一緒にアウトドア料理  
▲ものづくりで遊べる「工作小屋」を製作中

# 人気長寿番組「秘密のケンミンSHOW」プロデューサー 多くの人との繋がりに支えられて、今の自分がいます。

「秘密のケンミンSHOW」は、日本各地の知られる地域性や魅力を掘り起こして紹介する番組です。私は立ち上げ時からブロデューサーとして参加しています。昨年

10月に放送10周年を迎えたが、正直、こんな長寿番組になるとは思っていませんでした。ご当地ネタには事欠かない日本ですが、それでも無尽蔵に出てくるわけではありません。どんな切り口で情報を発信するか、スタッフ一同、日々格闘しています。

週2回の企画会議で、各地の食文化や風習、町おこしなどのネタをスタッフが持ち寄り、そこで共有いたします。

情報が本当に地域で定着しているのか、現地の方々が多く集まる施設やお店にご協力いただいて、徹底的にリサーチを行います。その後は県民を代表して熱く語つていただける出演者を探したり、ディレクターがロケで撮ってきた素材や編集をチェック。そこまでやつて初めてスタジオ収録に臨むことができます。新入からベテランまで、信頼できるスタッフや、各県の皆さんと築いてきたネットワークは大きな財産です

ね。街頭インタビューなどで「いつも観るよ」と声を掛けていただと、一生懸命に作つてきて良かったなと思います。

私自身、子どもの頃からテレビが大好きで、高校時代には漠然とテレビ業界に関心を持っていました。実家が自営業で、両親が家で仕事をしている中、ずっと兄や祖父母と一緒にテレビを観て育ちました。家族

に進んだのは、兄の強い勧めがあつたからです。ラグビーが好きな兄が言うには、「将来はおそらく、大学時代に風土の良い横浜で過ごすのもいいんじゃない」と。

合格した時、一番喜んでくれたのが兄でした(笑)。文学部英米文学科に在籍ましたが、当時の友人は今でもよく会います。音楽業界で働きたい、航空業界で働きたいため、将来のビジョンをはつきり持つた友人が多かったです。そうした友人と会う時はすごく楽しい、励みになります。



©ytv 「秘密のケンミン SHOW」



## お知らせ

# 関東学院大学 チャペルコンサート

関東学院大学では、金沢八景キャンパス礼拝堂とE5号館3階チャペルでパイプオルガンのコンサートを行っております。皆さまぜひお越しください。(事前予約不要、入場無料)

## ● 金沢八景キャンパス礼拝堂

開催日:毎週木曜日 17:30 ~ 17:50 金曜日 11:40 ~ 12:00

## ● 金沢八景キャンパス E5号館3階チャペル

開催日:4/19(木)、5/10(木)、6/7(木)、7/5(木)、10/4(木)、11/8(木)、12/6(木)  
12:25 ~ 12:45

※開催日等は、学校行事の都合により変更になる場合があります。

### 問い合わせ先

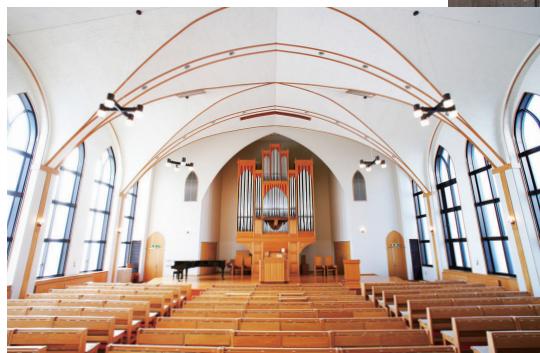
関東学院大学宗教教育センター

☎ 045-786-7218

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1 礼拝堂1階



金沢八景キャンパス礼拝堂▲



金沢八景キャンパス E5号館3階チャペル▲

